

ます。その次の「山小屋へ塩を無心に来た女」には、「×」印の横に「山女」と柳田の字で項目名が指定されていて、その上に、文の下に「○」印が書かれています。その他に「河童」など『遠野物語』と共通の話が続きますが、河童の話の次にある「これも其類か」には、話の内容から判断した「隠れ里」という柳田の言葉がある点がおもしろいです。

早川も、これらの話を集める時に、『遠野物語』を意識したでしょうし、柳田も、この時期、『遠野物語』と似た話をもっと集めたいと、喜善にも働きかけている時期なのです。

芥川が、その後、長崎の図書館で柳田と偶然会ったり、自殺する数年前に、座談会で、妖怪の話をしたりしていることは、石井さんが発表していますので、ここでは、触れませんが意識していたのだなということを押さえてもらいたいと思います。

文学面からの『遠野物語』の評価は、そこにも書きましたが、芥川から、三島由紀夫、洪澤龍彦と繋がっていきます。

その次に、では、桑原武夫が「『遠野物語』から」で芥川龍之介だけが評価して、他からの評価が少ない、と桑原が嘆いていますが、その桑原の「『遠野物語』から」を考えてみたいと思います。のちに文庫版の解説で、柳田國男が喜んでくれたと書くのですが、いつ柳田は、桑原にその思いを伝えたのだろうかということにもなります。

私は今まで誤解していたのですが、それは、桑原武夫は、フランス文学を研究し、西洋かぶれになる紙一重の時に、『遠野物語』を読み、日本にもこんな世界があったのだと驚いたという流れで理解していたのです。ところが、今回、柳田との接点を調べながら、桑原の人生を追っていくと、逆だということがわかりました。桑原は、早い段階、昭和の初めのことだと思いますが、初版本の『遠野物語』を読んでいます。そして、昭和10年に増補版が出たあとに、「『遠野物語』から」を書き、それからフランス留学に旅立ったのでした。桑原が単なる西洋かぶれの文芸評論家に終わらなかったのは、出発点に『遠野物語』があったと言ってもいいくらいに早い段階で出会っていたということと深く関連しているのだと思います。フランスから帰ってきてから、高校の先生をやったりして、最終的には、京都大学の人文科学研究所というところの教授になりますが、京都学派が自由闊達に伸び伸びと活動していた時期のメンバーのひとりとなります。東京に対するアンチとして、抵抗精神みたいなものは、あったのでしょうか。柳田は、東京帝国大学ですが、抵抗精神は負けていませんから、京都学派との接点が自然と生まれます。それでなくても、若い時から京都がとても好きで、奥さんや子どもたちも連れて旅行をよくしています。私は今、年譜を作っているのですが、つい先日、桑原武夫の名前と出会いました。桑原が、人文科学研究所の教授に迎えられたのが昭和23年だと思うのですが、昭和28年に、柳田は関西に講演旅行に来ます。これも関西のお弟子さんたちが手配して、奥さんと一緒に回るのですが、五来重に呼ばれて高野山大学で講演をして、そしてその流れで京都に行くのです。

柳田が高野山に入った時のことは、今までよく分からなかったのですが、常民大学の仲間が、今、高野町の副町長をしていますので、その友人に頼んでいましたら、様子を伝える新聞があることがわかりました。また、話を聞いていたお坊さんが取材に応じてくださるということもあり、この時の旅の様子が、はっきりしてくると思います。この時、毎日のように講演をしていますので、京都では2、3日ゆっくりとしたいということで、西村旅館という旅館にしばらく滞在するのです。ここは、これまでの年表では空白の時期なのです。講演をしていないプライベートな日に柳田が何をやったのかというのは、なかなか分かりませんが、昭和28年の4月24日から、高野山大学で講演をして、26日に京都に来るのですが、その3日間が空白だったのがわかり、そして、京都でのプライベートな数日間のこともしっかりわかってきています。桑原は、この西村旅館を毎日のように訪ね、柳田に得意の文学論をぶつけます、柳田の方も、もうこの時、78才くらいですので、桑原の文学論をただ笑って聞いていたという、まわりの人たちの思い出話があるのです。そのぐらい、柳田にとっては、桑原武夫は自分のことを、正當に評価してくれた後継者、文学のうえでの後継者の意識が芽生えたのかもしれない。その時の話にも、『遠野物語』の話はきつとでたのではないのでしょうか。この時も、柳田は、人文科学研究所を訪ねています。そして、この時の、人文科学研究所にいた、学者の中でもう1人おもしろい人が今西錦司という人です。どちらかと言うと、柳田の学問と

は、全然違う自然科学の動物学、生態学の方の人です。私もこの今西錦司について学問的にはよく分からないのですが、エッセイや山登りなど冒険のような話は読んできました。桑原武夫とこの今西錦司の京都学派と柳田との関連は、これからの課題ですが、『遠野物語』に関して言えば、間違いなく、早い段階での『遠野物語』との出会いを抜きには語れないと思います。

今西錦司もまた、『遠野物語』の350部のうちの1冊と出会っているのです。30番台の本だと聞いたことがあります。

先日、『民間伝承』という柳田がつくっていた雑誌をパラパラとめくっていたのですが、これも今回は日にちをはっきりと言えないのが残念ですが、今西錦司が調査で遠野に来ているのです。心理学の方面から、村の人たちの気持ちや都会の人たちとどのように違うのだとかそのへんを調査したようです。ロールシャッハテストを附馬牛でやったと出ています。お聞きになったことがある方がいらしたら、あとで教えてください。何年に附馬牛に来たかというのをもう1回調べたいと思うのですが、多分昭和28年の前後なのだと思います。まだあまり調べている人がいけませんので、興味がある方は、ぜひ調べてみてください。きっと、今西は、その時、早地峰山にも登っているのではないのでしょうか。もしかしたら、柳田が、遠野あたりがいいのではないかと言ったのかもしれない。

いずれにしても、桑原も今西も若いときに『遠野物語』の350部の初版本の番号つきのの本を読んで、そこから自分の学問をスタートしているということで、『遠野物語』が背骨の一つに入っているのではないかと思います。柳田國男と京都学派については、今後もっと研究が進んで、この辺のことがはっきりしていくのではと思います。

もうひとつ、折口信夫、金田一京助、富木友治と書いたのですが、特に東北の人たちにとっては、富木友治という人はちょっと知っておいていただきたいなと思って書きました。次の「資料⑥」をご覧ください。富木友治の年譜です。富木友治という人は、秋田の角館生まれです。菅江真澄が亡くなった角館で生まれて、どちらかと言うと、俳句が趣味というか、俳句をたしなんで、俳人のグループで同人誌などをつくっていた方です。それが、柳田國男の名前は知らなかったのに『遠野物語』にぶつかって、たぶん昭和10年の増補版を読んで衝撃を受けて、もう既に富木さんは、そこにコピーしてきましたが、昭和11年に日本大学退学の後に、「岩手県遠野に遊ぶ」ということで、すぐ遠野に来ています。桑原と同じ時期ですね。その富木さんというのが、鶴岡に、佐藤朔太郎という人がやっている言霊書房という出版社から本を出します。柳田は、山形や秋田に来る時には、その佐藤さんがお世話してくれるので、言霊書房で本を出そうというので、修験道の話の『黒百合姫物語』という本を出すことになるのです。その言霊書房から富木さんも本を何冊か出しています。山形、秋田の文化人でもあるし、柳田の理解者でもあるという人なのですが、残念なことに、昭和43年に52才で亡くなっています。この方が亡くなった後の昭和46年に、この富木さんを偲んで、昭和22年に書かれた『柳田國男 遠野物語をめぐりて』が出版されます。

こんな小さな本なのですが、これはたぶん図書館の郷土資料室にもあると思うので、興味ある方は、読んでみてください。その中に、池田彌三郎という、これも柳田のお弟子さんで、慶応大学の先生をやられた、文学と民俗学の研究をされている方ですが、こう言っています。柳田國男の学問のなかには、文学があるというのです。確かに、柳田は、若い時、詩を書いていますし、日本だけでなく、ヨーロッパの先進的な文学にいち早く触れてもいます。短歌も数多く作っていて、自然と口から出てくると言われているほどです。民俗学という学問をつくりながら、詩人の感性を忘れない、文学青年の感性を忘れない人だ、と言うのです。その民俗学の中で文学を活かしながら、文学の良さを活かしながら民俗学をつくっていったのは、柳田先生の他に、折口先生だけであるけど、この富木友治はそれを継ぐ人だったのに若くして死んで残念だということを書かれています。ですから、柳田民俗学の文学性が評価されるとすると、柳田一折口のルートがあるんですが、その中にその富木さんの俳句や日本文化に対する造詣の深さに対して、もっと評価していいんじゃないかということを書かれています。

少し長くなりましたが、柳田が生きていた時代の『遠野物語』をめぐる人脈の広がりについて述べてみました。

4. 『遠野物語』の読みの広がり

次に、「『遠野物語』をめぐる読みの広がり」ということで、研究の広がりと言ってもいい世界を紹介したいと思います。

私自身は吉本隆明という人の『共同幻想論』から『遠野物語』を読み始めました。『共同幻想論』というのは、はっきり言うと、みんなが信じている国家とか社会とかというのは幻想なんだということで、そういう共同の幻想と、男女の関係は対（つい）の幻想、それから自分自身の自己幻想と、なんだかよく訳が分からないのですが、知的に刺激的な本で、かっこよさに引かれて読み、そこから初めて『遠野物語』を読んでみようということで、『遠野物語』を読み始めたのです。

それから、鶴見俊輔さんのお姉さんで社会学者の鶴見和子さんですが、この人の『遠野物語』に対する論評はまた衝撃的でした。『遠野物語』に書かれていることは、戦前までの教育勅語の体制とまるっきり正反対のことが書かれている庶民の生活だと言って、社会学的な分析をされています。

もうひとつは、遠野の内からの『遠野物語』研究ということで、皆さんもご存じの菊池照雄さんの仕事があります。ここに至る遠野の中の人たちのいろいろな研究なども詳しく研究されていますので、吉本隆明の思想的な仕事、鶴見和子の社会学者としての仕事と、それから遠野の内からの仕事ということで、この三つの視点から研究は深まっていったと言ってよいと思います。（昔話研究については除きます）もちろん、遠野の内からの研究は、菊池照雄さんの仕事以降、遠野常民大学や遠野物語研究所、そして、ずっと続いている遠野物語ゼミナールといったものの蓄積もこの流れから生まれたものだ解釈すると、3番目の読みの広がり、遠野の内からの広がりということで、これからもどんどん膨らませていかなければいけない流れだろうと思います。

吉本、鶴見、そして、遠野の内側からの読みの広がりの流れがわかるように、研究書あるいは、エッセイを一覧にしてみました。今の水準がどのへんにあるのか、自分の興味はどこかを判断する材料にしてみてください。

5. 『遠野物語』をもとにした創作の広がり

最後に、創作の広がりということで、これが今日の私のメインテーマなのですが、話をするよりもどんなふうにといいのを見ていただいた方がいいと思ったので、最後にリストをつくってきました。上の方の「研究の広がり」までは、今まで話したことなんですが、『遠野物語』をベースとしてどんな本が今まで出されているかということです。最近、最近と言ってもこの30年ぐらいのリストなのですが、井上ひさしさんの「新釈遠野物語」をスタートとして、絵本ですとか、推理小説ですね。推理小説は多いです。「〇〇殺人事件」とかついているのがたくさんあります。これも、『遠野物語』の面白さのひとつでしょう。『遠野物語』には、犯罪の話が結構多いですね。私は、以前、『犯罪の民俗学』という本で、『遠野物語』のなかの犯罪と、その処置をめぐる人々の心性のようなことについて、思っていたことを書かせてもらいました。今の民俗学には、そういう興味をもつ人が少ないようですが、もっと注目されていい分野だと思います。

ということで、推理小説の舞台になることが多くなっていますが、最近、西村京太郎さんの『遠野伝説殺人事件』というのがあります。これは皆さん読まれたか。私もこの間読んだのですが、おもしろいけど、何かちょっと雑になっていて、話がすかすかの感じがしました。遠野で、主人公の女の人のお父さんが殺されて、それから父親の死の原因を調べるために娘が十津川警部と共に頑張るとい話なのですが、文章のなかでひっかかる点もありました。それは、そのお父さんが何回も遠野に来るのですが、その中で、娘に、「私は民話が好きだから、仕事を辞めた後は、この『遠野物語』を携えながら遠野を歩くのが生きがいなんだ」みたいなことを言うわけです。民話が好きだから『遠野物語』を持って行くというのには、ちょっと違和感を感じてしまいます。『遠野物語』は民話とは言えないし、そのへんが雑だなとは思いました。

それから、水木しげるさんが最近出した、『ビックコミック』で連載されていたのが1冊の本になったのはもう皆さんご存じだと思います。

この中で私がお勧めするのは、去年、東京の武蔵野市での「遠野物語ゼミナール」で遠野紹介を私がしたのですが、参加者の人に、本を読むんだらお勧めはこれですと言ったものです。それが、「おもいきり探偵団・摩天郎の黄金伝説」というものです。これは、今から20年ぐらい前、皆さんのお子さんやお孫さんが、その頃小学生だった方は、日曜日の9時のテレビ番組で、「おもいきり探偵団」というのがあったのですが、見ていなかったでしょうか。それは、石ノ森章太郎原作のドラマだったんですが、とてもおもしろいのです。今は、「ウルトラマン」とか「シンケンジャー」とか、そういう怪獣が出てくるようなドラマになってしまっていますが、この頃は、この「おもいきり探偵団」とか、山中恒の「あばれはっちゃく」とか、なかなか味のある子供向けの番組がありました。

この『摩天郎の黄金伝説』は、テレビドラマにならないで終わってしまったものだったのですが、ストーリーとしては、河童も、ザシキワラシもオシラサマも登場し、小友の金山と続き石を繋げるなど、アイデア満載で、もう少し、登場人物の設定が現実的であれば、テレビや映画にでもなりそうなものでした。残念ながら、今、30代ぐらいの世代の方で、昔、見たことがあると思ひ出してくれる方がいるくらいで、本も絶版となっています。

私は、桑原武夫の文章を引用しながら、日本の文学が、『遠野物語』の文学的な面を引き継がず、昭和の初期に入って、プロレタリア文学や私小説にしか行き着かなかったのは、「『遠野物語』の不幸」であると述べたことがあります。そのことに対して、村井紀という人が、『南島イデオロギーの発生』（1992年4月、福武書店）という本のなかで、「例えば小田氏」が言うような『遠野物語』を「出発点」とする「文学」などありはしないし、またできない。」と批判されました。今からずいぶん前ですが、そのまま反論もできずに、ずるずるときてしまいました。やっと昨年、ちょっと言いたいことを書かせてもらいました。

「ハリーポッター」とか「指輪物語」など、数年前からブームとなってきていますが、これらの文学も、ケルト文学の面白いところ、人間性の奥深くに踏み込む世界、不思議なところの「いいとこ取り」をしていると言われているくらいの創作作品となっています。日本にも、「ハリーポッター」に負けないくらいの、というともう負けていますが、超えるような作品が登場する土壌が、『遠野物語』や東北の文化にはあると思っています。このような土壌は、みんなが願えば、自ずと育ってくるものです。そう思います。

そんなことを考えながら、次の100年に向かう日々を、遠野のみなさんと一緒に過ごして、100年後の人たちと、「どんな因縁を結び得るか」を考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

(2010年2月28日)